

CASE5

エーワン株式会社 

伝発メイト

2時間かかっていた伝票発行が10分に！ 予想以上の効果に 現場スタッフからも太鼓判

「手書き伝票をなんとかしてシステム化できないか？」

そんなニーズから「伝発メイト」の利用に踏み切ったのが、OAラベル・用紙の専門メーカーであるエーワンだ。

実際に導入してみると、効果は予想以上に高く、それまでは2時間かかっていた伝票発行作業が、なんと10分で終了するまでになった。現場の担当者からは、「これも伝発メイトにできないのか？」という問い合わせが相次ぎ、当初は4種類だった伝発メイトを使った伝票発行は8種類と倍に拡大した。

企業DATA

設立 1959年5月21日
代表取締役社長 新井浩明
資本金 2億円
売上高 85億9200万円（2005年6月度）
従業員 121名（2005年6月現在）
URL <http://www.a-one.co.jp>

オフコンからオープンシステムへ移行、手書き伝票のシステム化に着手

OAラベル・用紙の専門メーカーであるエーワンは、常に新しい独自の製品を開発し、競争の激しい業界の中で、常に上位に位置している。ラベルという商品数が多いアイテムのメーカーだけに、迅速で安定した生産・物流体制を確立するために意欲的にシステムの増強を進めてきた。

生産と物流体制を支える基幹システムを強化していくために、2004年6月にはオフコンからPCサーバーへの切り替えを実施。オープンシステム化を実現した。

同社では基幹システムをオープン化したことにもない、従来からの課題であった手書き伝票のシステム化に踏み切った。

「大量の印刷が必要となる出力数の多い伝票については、基幹システムの中で発行できる仕組みを実現しました。しかし、1日あたり2、3枚から多くても10枚程度しか発行しない伝票については、基幹システムに取り込むには工数がかかりすぎると判断。約20種類の伝票が手書きのまま残ってしまっていたので

す（情報システム課・菅野主任）

「伝発メイト」で伝票作成が簡単に実現、操作方法も1日の指導でマスター

手書き伝票として残った20種類の帳票は、顧客に商品を送送する際に必要となる、顧客指定の納品書がほとんどであった。手書きで数字を入力すれば、間違いも発生しやすい。「基幹システムとデータ連携を実現しながら、簡単に帳票印刷を可能にする仕組みはないだろうか？」と模索していた同社にJBCCの伝票の発行と印刷を行う「伝発メイト」が紹介された。

「実は、そういう悩みなら、伝発メイトがいい」と複数の会社から推薦されたんです。実際に商品を見せてもらったら、確かに会社の悩みを解決できる商品だと思いました。ただ、最初に見せてもらったデモンストレーション通りに動くのかな…という不安もあったんですが、「菅野主任は笑った。その心配は杞憂に終わった。」

「実際に使ってみると、デモンストレーション以上に簡単に伝票作成ができました。最初にJBCC側に4種類のテンプレートを作ってもらい、1日、JBCC



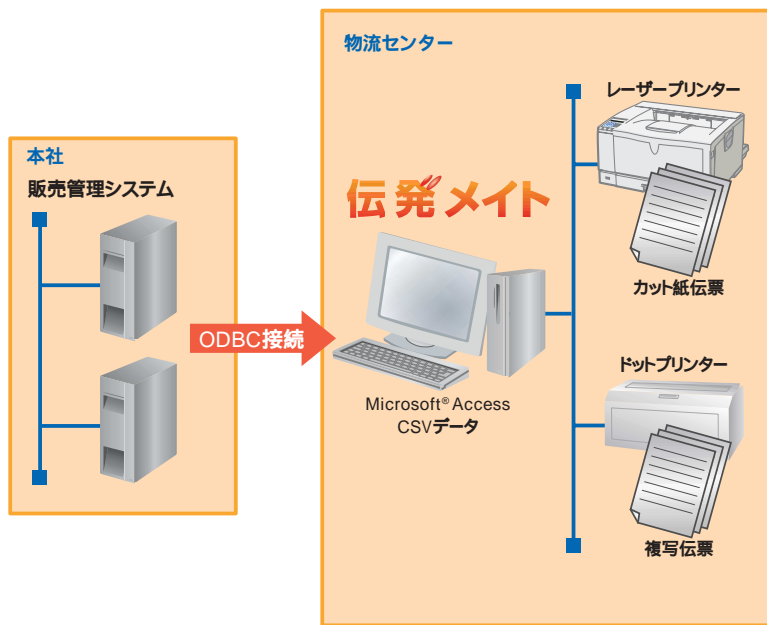
情報システム課 主任 菅野 徹氏

Cの方に来社してもらって伝票設計を見せてもらいながら、操作指導を受けました。基本的にはその時だけで操作方法などを覚えることができました（菅野主任）

伝発メイトの伝票作成は、実際の伝票をスキャナで取り込み、その上にトレースするスタイルで行う。トレースしたものは、最小0.1ミリ単位で微調整していくことが可能となる。そのため、「伝票作りの経験が全くない、私でも簡単に伝票作成ができるようになったんだと思います」と菅野主任は話す。

基幹システムと連携しデータ取り込み、驚くほどの業務効率化を実現

伝票の中のデータは、基幹システムからボタンひとつでデータが出てくる仕組みを用意。Microsoft Accessを使い、



POINT

基幹システム強化のため、2004年6月にオフコンからPCサーバーへ切り替え、オープンシステム化を実現。

伝票設計と印刷を行う「伝発メイト」を複数の会社から紹介されて導入。

伝票に印字される数字データは、Microsoft® Accessを使いODBC経由で基幹システムに接続、出荷データを取り込み伝発メイトで作った帳票に印刷。

「伝発メイト」が独自に持てるマスタを使い、郵便番号に対応した宅配業者の営業所番号を割り出して印刷するシステム。

ODBC経由で基幹システムに接続し、出荷データを取り込み、伝発メイトで作った帳票設計通りに印刷する仕組みとなっている。

その結果、手書きだった際には、繁忙期で2時間かかっていた伝票発行作業が10分で終了することとなった。手書きで伝票を書いていた現場スタッフは、パソコンの操作が得意でない人も多いが、簡単に操作ができる

ために、「これは使いやすい」と感嘆の声があがったという。

情報システム課の土田直弘課長は、「実は産休をとっていたスタッフがいて、伝票を発行する現場担当者の数が減っていた時期に伝発メイトの利用が始まったんです。どうやって繁忙期を乗り越えるか悩んでいたのに、スタッフの数が減っても作業は短時間で終わってしまっただけ。印字されるデータも、基幹システムと連動している

ので、手書きの時のような間違いは起こりません。まさに導入していいことづくめの製品でした」と伝発メイトの効果を指摘する。

ペーパーレスが叫ばれる時代となっているものの、伝票が活躍する場面はまだ多い。「ペーパーレスが叫ばれながら、納品書は印刷して商品に添付して

欲しいというお客様もまだまだ多くいらつしゃいます。伝発メイトの出番はたくさんあると思います」(土田課長)

現場の要望から広がる活用方法、宅配便の送付伝票もスムーズに印刷

実際に当初は予測もしなかった活用方法も生まれました。

物流倉庫から商品が発送される場合、宅配便業者によって荷物が送られることもある。荷物を受け取った宅配業者は、荷物を届ける場所の最寄りの営業所のコードを記入する。「郵便番号を見て、そこから対応表を確認して書き込むため、かなりの時間を費やしていたのだそうです。これは当社のスタッフの業務ではないのですが、宅配業者が作業を終えるまで当社のスタッフが立ち会わなければなりません。当社の作業が終わっているにもかかわらず、宅配業者の作業を待つということが度々ありました」(菅野主任)

そこで物流の現場から、「伝発メイトを使い、なんとかできないのか?」という問い合わせが情報システム課に寄せられた。菅野主任は、「伝発メイトは独自の

マスタを持てるため、仕組みとしては郵便番号に対応した宅配業者の営業所番号を割り出して印刷するというシステムになります。しかし、郵便番号はとにかく件数が多い。全国で10万件存在するので、印字するまでに時間がかかりすぎるのではないかと懸念しました。でも、実際には予想よりも迅速に印刷することができました」と話す。

最近では、「これも伝発メイトを使ってシステム化できないのか」という問い合わせが現場から次々に寄せられるようになった。その結果、当初は4種類だった伝発メイトによる伝票発行は8種類に拡大しているという。



エーワン取扱商品の一例